

## 論 文

現代の「傷ついた癒し手」(2)<sup>35)</sup>— ドラブルの *The Needle's Eye* (1972) 考 —

## 風 間 末起子

同志社女子大学  
表象文化学部・英語英文学科  
教授4. Simon の倫理観：  
“charity is a form of love”<sup>36)</sup>

前章で眺めてきたように、Simon Camish（法廷弁護士）は、Rose Vassiliou（資産家の一人娘だがロンドンの貧民街に暮らす女性）が放つ光に導かれ、自身の精神的復活を果たしてきた。しかし、この光は Simon が見ていた Rose の一面であり、彼女の光に伴う陰の部分が次の局面では Simon にも明瞭に見えてくる。つまり、Simon は Rose の苦悩の現実と直面することになる。Rose は法的な係争に疲れ果て、3人の子供たちを前夫に引き渡す決意を Simon に唐突に切り出す。この時、Simon は、現代のキリストを彷彿とさせる「傷ついた癒し手 Rose」さえもが克服できない苦悩を抱えている姿と直面することになる。<sup>37)</sup>

Rose は Simon の法律事務所で、自分が如何に利己的で頑迷な人間かを強調しながら、唯一の解決策は前夫 Christopher に子供たちを引き渡して自分は国を出ることだと告げる。Simon は、Rose の決心が非論理的だと知りながらも、彼女を思いとどまらせることができない。法律事務所の窓から見える Rose の立ち去る姿は「死んだ小鳥」にたとえられる。Simon は受難する人を見て、それは自分の姿だと感じ取る。

... relentlessly, inevitably, she grew smaller, and went away. It was not optical, the impression of her going; it was more than she shrank on his grasp, as her bony shoulder had sunk like a dead bird beneath his hand. He had failed her, he had done nothing for her, ... He knew that way walking, a posture of

“The Wounded Healer” in Contemporary Society (2): A Study of *The Needle's Eye* (1972) by Margaret Drabble

indifferent pain, a shrugged confronting of a hostile element. It was his own. (p. 260)

Simon は法律によって社会の中に秩序を作り出せると考えている。法律は絶対的な効力を持つものではないが、社会的不正や無秩序、不平等を是正できる合理的な道具だと彼は信じている。ところが、Rose はその法律の合理的判断や客観的判断に頼ることを放棄する。「法律や暴力では何も解決しない」(p. 181) という Rose の以前からの思いが実践され、別の方法（人間性の修正）で問題の解決を模索しようとする。詰まるところ、Simon が Rose を法律で救済できないとわかった今、Rose は彼に法律の脆弱さを突きつけたことになる。Simon 自身もその事実を承知しているから、極めて冷静に対処する以外になす術を知らない。その一方で彼にはわかってもいた。Rose があの場で欲しかったものは、Simon からの人間的な対応や愛情であったことを。この場面は、キリストが律法学者を評して、「人の重荷に指一本貸そうとしない人間」と批判した言葉が Simon の姿に重ねられている。<sup>38)</sup>

さて、ドラブルは、“The Author Comments”（自分の作品を評した Mannheimer の評論の末尾に付けたドラブル自身の弁明）の中で、人間は過去から自由になれないし、他人の要求からも自由になれない、だから Simon が Rose を選ばずに妻 Julie との結婚生活を続けていく決断をしたのは敗北的な行為というよりは “an act of unselfishness” である、と Simon の決断を肯定的に解釈している。<sup>39)</sup>

ドラブルが評価する Simon の利他的な行為を義務感と言い換えることもできるだろう。しかし、Simon 自身はその義務感に満足していない。彼は、Rose と知り合ってから間もない頃、彼女が日常生活を愛情を込めて実践することが大切だと語る時、自分の場合は愛情を込めて行動をした記憶がないから、Rose の言葉が理解できないとつぶやく。しかし、Rose は愛情を次のように解釈する。Simon が今実践しているように、他人の話に長時間、耳を傾けること

自体が慈悲の行為であり、慈悲は愛の一つの形である。もし Simon が心の中で早く帰宅したいと思っていたのなら、なおさら彼が親切であったことを証明することになる。こう言って、Rose は Simon の善意を評価する。

Simon 自身は、義務を果たすことはそれなりに価値があるかもしれないが、その一方で義務感は感情を損なわせると反論する。しかし、小説結末部でも、Rose は再度、Simon の控えめな寛大さを評価する。Rose は彼の結婚生活を示唆して、「あなたは何も見捨てないからいい人なのよ」(p. 283) と言う。再び彼は責任感から行動しているにすぎないと言い返す。Rose はそれで十分だと言う。結局、彼女自身も、Simon に習う形で、家族に対して責任を果たしていくことになる。Rose の倫理観については次章で詳しく論じたい。

Simon の責任感や義務感といった倫理観が如実に現れるのは、彼が Rose との結婚を頭の中で想像したあとで出した結論の中にたどれる。Simon は、Rose と自分は同じ関心事や目的をもった人間、同じ価値観を共有する人間であると感ずる。この二人の結婚こそが、彼の理想とする結婚である。ただし、そうした種類の結婚はたいてい二度目の結婚であり、それが致命的な問題となる。人は最初の結婚を壊すことを前提にして、どうやって二度目の結婚に踏み切ることができるだろうか。Julie (Simon の妻) や Christopher (Rose の前夫) や子供たちを犠牲にしてまで自分の願望は果たせない。Simon の倫理観は、Rose が Christopher を犠牲にしてまで現在の母子生活を続けられないと判断して、彼を呼び戻した行為に類似している。その意味で、この二人は、ドラブルが小説の巻頭につけた William Butler Yeats (1865-1939) の詩の一節、「困難なことに魅せられて、私の血潮は干上がり、私の心はかきむしられた」という言葉と平行する生き方をしていることになる。

彼らの義務的な生き方は、Roxman が説明する “deontological morality” (義務感を基盤にした倫理観) であり、Roxman はこの倫理観を “utilitarianism” (功利主義) と比較・対照し、Simon と Rose の倫理観を分析している。<sup>40)</sup> Roxman は、二人の義務的な行為は弱者への思いやりであり、“the principle of non-privilege”<sup>41)</sup> (特権に頼らない) に基づいた倫理観であると解釈している。それは功利主義的倫理観のように、必ずしも人を幸せにしないが、義務の倫理観で重要なのは、行為の結果ではなく行為の意図と動機にある。それを裏づけるように、Simon は、この世に救いがあるとすれば、それは互いが互いを助け合う姿

勢の中にあると信じている。<sup>42)</sup>

この倫理観に支えられていたからこそ、Simon は Rose の精神的な弟子となり、ペトロがキリストに従ったように、彼女のあとに従ったのである。<sup>43)</sup> 「物事は必ずしも思い通りにはいかない」(p. 363) という Rose の含蓄ある言葉には、人生への彼女の受けとめ方が読み取れる。次の章では、Rose の倫理観について詳細に分析してみたい。

## 5. Rose の倫理観：“Perhaps she would be forced to abandon herself and to return to her non-self” (p. 179)

Christopher (Rose の前夫) が偽装した子供の誘拐事件は “Whitsunday” (聖霊降臨祭、復活祭後の第七日曜日) に起こる。Simon の精神的再生の仕上げはイースター休暇にコンウォールの海辺で成し遂げられたが (拙論第3章<sup>44)</sup>)、Rose の場合は、伝道者としての受難はまさに聖霊降臨祭の休暇中に始まる。

Rose は自分の精神的基盤を作り上げたものを探すために過去にさかのぼっていく。過去への旅は、拙論第3章でもふれたように、ドラブル小説では人物たちが自身の人格形成の再確認をする常套手段である。Rose は、自分がなぜアフリカの小国に金を寄付したのか、どうして現在の精神構造をもつに至ったのかを確認するために、自分の少女時代に、もっと具体的に言えば、実家 (実業家の父が所有する広大な屋敷) で子守をしていた女 Noreen のかつての部屋に入っていく。

Rose と過去のつながりを示すものは、子供の頃から丹精した押し花の収集ノート、子守の女 Noreen の存在、子供時代の愛読書 John Bunyan (1628-1688) の2冊の本、そこに挟まれた誕生日カードなどである。なかでも Noreen の教条的な聖書解釈は Rose の幼い信仰心に有害なほど影響を与えていた。

実家に着いた夜、Rose は Noreen の寝室だった部屋に泊まることになるが、その部屋で過去の確認と過去からの脱却を行う。Rose は8歳の頃、教会の説教、「金持ちが天国に入るより、ラクダが針の穴を通るほうがたやすい」(マタイ19:16-30; ルカ18:24-27) を文字通りに受けとめた。その思い込みは、教会から帰宅した日曜日に両親が話題にしていた近所の泥棒事件と保険金の話しによって強化された。金銭に執着する両親の会話に触発されて、Rose は失うことを恐れるようなものを自分は決して所有しまいと誓いを立てる。Noreen は Rose の家族の富みが

罪の根源であると罵っていたが、説教は Noreen の考え方を正当化するものとなった。

“freak” (p. 75) とも言えるこの信念は、Noreen が剃刀の刃は危険だと予言したことと符合する。幼い Rose は父の剃刀の刃を指で握りしめてみる。すると途端に出血し、Noreen の警告の正しさを確信する。この場面は、懐疑的な弟子トマスが懐疑的な幼子 Rose に重ねられている。<sup>45)</sup> Rose は、*Pilgrim's Progress* (1678, 1684) の巡礼者の自問、「救われるためには何をしたらいいのだろうか」という問いを自分にも問いかけていく。彼女は救われるために、聖書の言葉通りに、物質的なものを放棄して天に富を積む手段を採用した。Rose は21歳で、貧しいギリシャ移民の息子 Christopher と結婚し、ロンドンの労働者階級の地区に11年間住みつき、自分に贈与された多額の信託金をアフリカの学校建設のために寄付してしまう。このように、Rose の信仰は Noreen の部屋の内部に集約されている。つまり、救済への狂信的な執着が確認されるが、このあと、Rose は過去を突き抜け、新たな解決策を探らねばならない。

中央アフリカ (Urumbi) への2万ポンドの寄付は、結果的にはアフリカの人々を救わなかった。内乱によって学校は焼失し、何千人もが殺害された。他方で、その寄付金は短期間ではあったが、建設業者に仕事を提供し子供に学校を与えたことも事実である。いずれにしても、Rose は自分の行為が砂上に家を建てたに過ぎないと悟り、大義のために働くことでは救われないと自覚する。<sup>46)</sup> このように、“faith” や “works” (p. 329) が天国へのカギではないと悟って以来、なおも Rose は「救われるためには何をしたらいいのか」を問い続けてきた。

Rose には唯一諦められない存在がある。3人の子供たちである。この子供たちを、法的に要求し続ける Christopher にゆだねようと決意した時、Rose はカフェで、一つの ‘vision’ を付与され、進むべき方向を示される。その啓示は、Rose が子供たちを諦め、アフリカに旅立って、自己否定の人生を送るようにと促す。神がアブラハムにイサクを要求したように、神が要求するものは犠牲である。人間は妻、母、子供を捨てなければ天国に入ることにはできないと、Rose は再び聖書の言葉を文字通りに解釈する。<sup>47)</sup>

しかし、他方でこの啓示から解放されることを願うもう一人の Rose が存在する。「子供たちをすぐに学校に迎えに行こう」(p. 264) と思い立つ Rose の姿は、自己否定から、そして Bunyan からの決別を予表する。Rose はまず、アフリカの飛行場にいる想像上の女と、カフェにいる現実

の女の間で分裂する。その自我の分裂はダブル作品に頻発するように、統合のための最初のステップである。<sup>48)</sup> Rose は子供を断念するという自己否定の衝動を抑え、逆に子供を連れ戻し、批評家 Ellen Cronan Rose が言う “the last ghost of patriarchal religion, John Bunyan”<sup>49)</sup> を追い出す。Ellen Cronan Rose は、「神」という存在が父権的宗教の内面化にすぎない事実 Rose が気づいていると解釈する。父権的宗教は自己と他者(神)を二項対立化させ、他者(神)と比べて自己は価値がないから、神と統合するためには自己を越え、自己を否定することによってのみ、その統合は達成される。しかし、この思考は、女性にとっては、女性の主体と客体の二極化の再現にすぎないから、Rose は宗教的二項対立を越えようとしている、と分析される。<sup>50)</sup>

犠牲と諦念を強いる信仰を捨てることは、Rose にとっては子供時代から取り憑いてきた Bunyan の亡霊との決別を意味する。“Transcendence loomed over her head like a great owl” (p. 316) という表現で示される Rose の超越的なものへの憧れや、“renunciation” (p. 301) は放棄され、その代わりに Rose は “acceptance” (受諾) (p. 304) という代案を選ぶ。つまり、彼女は実父と前夫 Christopher への許しを感じ始めるのである。

しかしながら、Ellen Cronan Rose は、Rose のこの代案に懐疑的である。彼女は、Rose が Christopher を受け入れる行為は権威ある存在(神)を別の存在(前夫)に置き換えることだと解釈する。<sup>51)</sup> だが、同時に、Christopher が Rose に “grace” (p. 332) の状態を与え、彼女を実家や宗教的呪縛から救い出したことも事実である。Rose が Christopher を愛したことも事実だし、彼との結婚によって、現在の「岩の上に建てた家」(マタイ7:24)も作り上げることができたのである。さらには Christopher が宗教的熱狂主義から Rose を救ったことも事実であった。彼は Rose の宗教的善行が如何に逆説的に機能するかを Simon に皮肉っている。

‘... how absolutely wicked and selfish people are when they get hold of this idea of being good. They destroy everything about them. They end up in a burning desert.’ (pp. 232-233)

天に宝を積むためにアフリカに大金を寄付する一方で、自分の子供たちをスラム街に住まわせ、子供たちから豊かな環境を奪い取った Rose の非現実的な態度を Christopher

は糾弾する。<sup>52)</sup> 人間が善であろうとすればするほど邪悪になっていく逆説的な現実を Christopher は指摘してみせる。この逆説性は再び、Rose の結末の状況に提示されることになるが、それについては最終章の第6章で扱いたい。

先に、Rose は“renunciation”を放棄して、その代わりに“acceptance”という代案を選んだと述べたが、次の引用は Rose が実家のバラの庭園で Christopher と子供たちに出会った時の彼女の内的変化を記している。

Her spirit, for the first time in years, moved to acceptance: she felt it embark for that final flight, she imagined it might one day rise and reach and settle in the clearer air. (p. 304)

“They converged, and met.” (p. 301) という表現にも、Rose が歩み寄り、許容する姿勢が読みとれる。その譲歩の態度は、“ever since meeting him in the garden, she had been feeling (in the peace of victory) a slight forgiveness” (p. 321) へとつながっていく。同時に Rose は相変わらず不遜な父親の態度を眺めながら、それが悪意からではなく他の表現方法がわからないからだと寛容な気持ちになっていく。「私はみんなを許すために、ここにすわっている。私が間違っていたってこと？ それとも私は怒るのに疲れてしまったということ？」(p. 323) と Rose はユーモラスに自嘲している。

この許しと寛容の心によって、Rose は最終的に Christopher を受け入れ、彼と一緒に暮らすことを選ぶ。Rose の解決方法についてはさまざまな解釈が可能である。少し長くなるが、代表的な論評を取り上げてみたい。

まず、肯定的な論評としては Lay を挙げることができる。Lay は、Rose も Simon も多くの幻想を捨てたあと、意志と選択によって元の立場に戻っていく。彼らは無私の精神と共同体への帰属感をもつことで、勝者としてではなく、“perceivers”として元の場所に戻っていくと分析する。<sup>53)</sup>

Myer は、Rose の母性愛は創造性、犠牲、超自然性との同化、自然との同化として読み取ることができるから、Rose は無意識に肉体と精神の和解を行っている。その意味で、この作品は急進的フェミニスト神学の大胆な表明であると解釈する。<sup>54)</sup> この解釈はあとでふれる Ellen Cronan Rose の解釈とは大きく相違している。

作家ドラブル自身の Rose 評も肯定的である。ドラブルは、Rose が法律の判決に反して、Christopher を呼び戻し

たのは、彼女の生き方が彼を異常な行動へと駆り立てた事実を Rose が客観的に認識できたからであり、Rose の決断は共同体や家族への責任感から生じた成熟した行為である、とコメントしている。ドラブルは“matriarchy”の世界で生活できたらどんなに楽だろうとも言っている。<sup>55)</sup>

Roxman も Rose の選択を肯定的に分析している。Roxman は、Noreen が資産家 Bryanston 家 (Rose の実家) の経済的豊かさを非難する態度には、非国教徒の倫理観と社会主義思想とのリンクが暗示されていると指摘する。何よりもドラブル自身が不平等な配分への罪意識が強く、それが Rose に反映されていると解釈される。<sup>56)</sup> 特権を持つ者と持たない者という構図を解決するための Rose の方法は、最初は富裕な実家の拒絶で始まり、所有する金をアフリカに寄付することで富を切り捨て、自分はロンドンのスラム街で暮らすという実践方法であった。次に Rose は法律に訴えて自分の利益 (子供の養育権) を守ろうとし、法律が暴力やテロや戦争を回避させる有効な手段だと考えるが、Christopher との裁判を通して、法律自体も特権ある者にとっては闘争の武器になり得ると悟るようになる。“There was no solution, through violence or law” (p. 181) が Rose の行き着いた結論である。キリストが金持ちとラクダと針の穴のたとえを語る時にも、永遠の命を受けるには律法を守るだけでは十分ではないと言った。Rose もその考え方に沿って、法律の勝敗に頼らない別の解決策を選ぶことになる。

持つ者と持たない者の両者の軋轢を解決する方法として、Rose は、Roxman が名付ける“the principle of non-privilege” (特権に頼らない倫理観) を体得していると Roxman は解釈する。Rose が相続権を剥奪されていたとしても、税金対策として父親が取った手段によって Rose には信託金が今後も入ってくるので、彼女は法的には女相続人のままであるし、母親としての立場も法的には父親の Christopher よりも有利である。従って、Rose が Christopher を呼び戻したのは、“the principle of non-privilege” および“deontological morality” (義務感を基盤にした倫理観) を応用・実践したからである、という解釈である。特権を捨てた義務感に基づく倫理観は、この作品のテーマと密接にリンクして、人物たちの行動を規定している。

次に否定的な解釈を取り上げてみよう。Ellen Cronan Rose は、*The Needle's Eye* 以前の作品は“the situation of being a woman”についての作品であったが、*The Needle's Eye* は“being a woman in a world of patriarchal ideologies and institutions”についての小説であると位置

づけている。Rose は男性原理の法律の基盤である二項対立（勝者 vs. 敗者）を崩すために法律に頼らない別の選択をするし、同じく二項対立を基盤にした父権の宗教からも離れようとする。が、結局、彼女はそれを完遂できないで終わっていると分析されている。<sup>57)</sup>

結果的に、Christopher が要求する養育権は、子供の誘拐という彼の狂言が原因で裁判の場で却下される。Rose は裁判に勝ち、Christopher は負ける。だが、Rose は、むしろ Christopher を家に迎え入れることで法廷でのこの決定を越えようとする。法律が精神や心の問題を解決しないと気づいているからだ。Ellen Cronan Rose は社会心理学者の Nancy Chodorow の理論を引用し、男性の自我の意識は分離から始まり、男性は他者と自我を分離したものと見なすが、女性は他者と連結したのものとして自分を経験するから分離を必要としない。Chodorow のこの理論を援用する形で、Ellen Cronan Rose は、父権的思考が二項対立的（“dualistic”）で優劣をつけるものであるならば、母権的思考は全体論的（“holistic”）であり、包括的なものであると解釈し、Rose の選択の中に後者の意義を見出している。法律と同様に、宗教も二項対立的な思考であり、神 vs. 自己を対立させて、救済のためには自己否定を選択させると Ellen Cronan Rose は指摘する。Rose の場合、子供を諦めないという選択によって、自己否定を放棄したが、Christopher を迎え入れることで彼女自身の精神的安定を犠牲にしていると解釈されている。

この結末は、多くのフェミニスト批評家によっても裏切りだと糾弾されているが、Ellen Cronan Rose も、この結末についてのドラブル自身の考え方が混乱していると指摘する。特に隣人愛に対するドラブル自身の考え方が規範的な二項対立的な図式で終始しているとして、Mary Daly (*Beyond God the Father*, 1973) のフェミニスト神学と比較している。フェミニスト神学では、自分を愛することと、他人を愛することは同時的で相互的だと見なすので、自己愛と隣人愛の間には葛藤は存在しない。しかし、ドラブルはインタビューで、「自分自身を愛するのは構わないが、それが最終目的ではない」<sup>58)</sup>と発言することで、他人を愛することは自分を愛することよりも重要であり、自分を愛することは他人を愛するというもっと善なるものへの必要なステップであると表明している。この考え方自体が父権的宗教の価値観（自己と他者の区別を作る）を繰り返していると、Ellen Cronan Rose はドラブルの宗教観を否定的に解釈する。

このように、Rose の最後の決断と選択に対する評価は

さまざまであるが、私は、Rose の選択を説明する時、“fate”と“paradox”という言葉を手がかりにして分析したい。「物事は必ずしも思い通りにはいかない」(p. 363)と語る Rose の言葉は先にも引用したが（本稿の第4章）、ドラブル作品では、“free will”と“fate”の両立（和解）と二律背反は大きなテーマである。<sup>59)</sup> その意味では Rose が「選択」と言う時、彼女の選択は自分の意志で自由に選んだものでもあるし、同時に運命づけられた逃れようのない必然的なものでもある。

例えば、次の場面では、Rose の Christopher とのめぐり合わせが、Rose の自由意志からではなく、運命づけられ受諾すべきものとして描かれている。Christopher の誘拐事件の狂言が納まった後で、Rose はノーフォークの実家で、Simon と Christopher、そして子供たちと共に宿泊する。その晩、彼女は Christopher の挙動が心配で子供部屋に入っていく。Simon も眠らずに服を着たまま自室にいる。<sup>60)</sup> 廊下では、Christopher が Simon の部屋の前で何かを探っている気配がする。この場面で3人は廊下で鉢合わせをする。Rose は眠らずに廊下をうろついている理由を Christopher に尋ねられた時、「もちろん、あなたを避けようとしていたから」(p. 337)とってしまう。その言葉は、Rose を愛する Simon を傷つけたし、同時に Christopher を当惑させ満足もさせた。どちらの反応も Rose の本意ではなかったが、彼女がとっさに返したその言葉は結局、次のように解釈されている。

It had been a fatal admission — fatal to admit that she was aware that he might have been looking for her, fatal to admit that even so dim a connection might still exist. (p. 337)

わずかな絆だが、それでも二人の間には絆がまだ存在していたことを「認めるように運命づけられて」いた。その細い絆は翌日の海辺のピクニックにつながっていく。そこでは、子供のしつけのことや、ランチの場所をどこにするかなど、極めて些細な事柄で口喧嘩が起り、“their domestic life” (p. 346) が厳然と存在する。絆は確かに存在し、Rose はそれを認めざるを得ない運命のもとに置かれている。

次の最終章では、Rose の結末の状況に提示された逆説性について論じ、それを糸口に、この作品のテーマである「信仰なしに宗教的な生活をおくる可能性」についてのドラブル的思考方法の結論部としたい。

## 6. 逆説性と矛盾を楽しむ：

“now she lived in dispute and in squalor,  
for the sake of charity and of love.” (p. 365)

*The Needle's Eye* の中で頻発する逆説性は、自由意志と運命の並列に連動している。なぜなら、人間の理性では推し量れない運命が働いていると考えるから、人生は逆説的に展開するように見えるからだ。

さて、Simon は、Rose が Christopher と暮らし始めてから一年半が過ぎた今も彼女をじっと観察している。Christopher は、Rose の実父の仕事上のパートナーとして働いているので羽振りがよい。Simon は Rose の生活様式や価値観が変化したかどうかを見きわめたいと考えている。まず Rose の部屋を観察する。部屋は少しだけ変化した。古い長椅子を処分して新しい長椅子を購入したが、大きな変化はない。

ただ一つ、大きく変化したものがあつた。それは Rose の性格の変化である。彼女はすぐに苛立ち、人前でも Christopher と理由もなく喧嘩をした。詰まるところ、Rose と Christopher の和解と平穏な家庭生活という大団円はこの作品の結末とはならない。この章のタイトルに付けた作品からの引用文、「Rose は今や慈悲と愛のために、口論と浅ましさを生活を送っていた」(p. 365) は、まさに Rose の人生の現実の逆説と矛盾を伝えるものである。Rose は相変わらず夫が好きではないし、彼の出張（不在）を心から喜び、子供たちに対しても口やかましい母親になっている。

Rose は、子供たちに父親を与え、夫には子供と家庭を与えるために、愛と許しの心で共同体との絆を維持しようとして決意した。ただし、口やかましく苛立ちながら。この矛盾した行動は、パウロの愛の讃歌の一節、「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル」(コリントの信徒への手紙1, 13:1) への逆説的アリュージョンである。Rose の場合は、どらやシンバルを鳴らしながら愛を実践しているわけだ。この引喩を意識して、Rose は、いずれは自分の騒がしい声も正義のラッパの響きも狂信的な思想のうなり声も鎮めていけると信じ込もうとした。

... the harsh clanging of her own voice, the sounding of righteous brass and the clanging of the symbols of her upright faith-demented ideologies, she would silence them all, she would learn to do so. (p. 366)

Rose はそうした愛の行為の矛盾を次のようにも表現している。彼女は、「正しい理由があれば自分の魂を売ってもかまわないの？」(p. 366) と Simon に問いかける。この言葉は、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか」(マタイ16:26) と語るイエス・キリストの言葉を逆手にとったものである。Rose はキリストの教えとは逆のことを行っている。夫と子供たちに家庭を与えることと引き換えに、彼女は自分の魂を犠牲にしている。

このような聖句の逆説的な借用は、他にも作品の随所に散見できる。次の場面は、ヤコブが夢の中で、天へと通じる階段を天の御使いたちが上り下りしているのを見る聖書の箇所(創世記28:12)を連想させる光景である。Rose と Simon はアレキサンドラ・パレスのドッグ・ショウを上の方から見るために、高くそびえる木製の階段を昇っていく。昇るにつれて周囲は明るくなり、窓からは冬の日射しが差し込んでくる。その光は Rose の毛皮のえりの毛先に垂れている髪の毛に反射して、一本一本が何千という火花となって輝く。髪の毛と毛皮は一体となり、太陽が投げかけるすべてのものを受けとめて燃えるように輝く。それは獣の死体から生まれた百万の命、彼女の頭から生まれた百万の命のように見えた。百万の細かな光がまばゆいばかりの輪郭を描き、百万が一つとなった。これは Simon が Rose を後方から見上げた時の光の描写である。

... her hair itself, falling on the points of her fur collar, fell into a thousand bright individual fiery sparks, the hair and the fur meeting, radiant, luminous, catching whatever fell from the sun upon them, stirring like living threads in the sea into a phosphorescent life, turning and lifting, alive on the slight breeze of her walking, a million lives from the dead beasts, a million from her living head, haloed there, a million shining in a bright and dazzling outline, a million in one. She walked ahead, encircled by brightness, ... (pp. 362-363)

この場面では、死と生命は同列に置かれるが、度合い的には、光の力は死の力に勝っている。虫に食われた Rose の毛皮のコートは獣の死を連想させてはいるが、同時に後光のように輝く Rose の髪の毛は、彼女の生き延びる力を幻想的に描写したものである。いや、むしろ、Simon が癒し手としての Rose の中に見た天の恩寵 (“grace,” p. 365)

と天の光明 (“bright gleams,” p. 365) の幻視だったと言える。その幻視は、Rose が階段から降りると消失し、髪の毛も死んだ毛皮のように生氣を失ってしまう。

それに呼応する形で、犬の鳴き声は狂犬病のことや、犬に食い殺された乳母車の赤ん坊のことを連想させ、この世の残忍さが彼らの脳裏によみがえってくる。Emily (Rose の友人) が読んでいる新聞の記事にも、爆発的な人口増加と自動車事故、海に飛び込んで集団自殺する人々の事件が報じられている。Emily は、新聞記事が示す人間社会の厳しい現実に対応して、次のように挑発的にこの世の悲惨さと人間の惨めさを言い放つ。

‘Life is real, life is earnest, and the grave is not its goal, dust thou art to dust returneth was not spoken of the soul. It’s all very well ... but the whole *world* is turning into dust. People are like rats. Look at them, rats. We’ll start living in the sewers, soon.’ (pp. 367-368)

しかも、Emily のコートにべっとりと付いた黄褐色のホコリは全世界がチリとなって破滅する将来像に連鎖されている。<sup>61)</sup> “shoddy,” “decayed,” “shabby,” “despair” (p. 368) のイメージは朽ちかけた通俗的な黄色い巨大なパレスに引き継がれ、さらに高いテラスから眺望できるロンドンの景色にも同じ現実が広がっている。立ち並ぶ家屋、立ちはだかる塔、光る下水処理場の池、ガス工場、鉄道線路など、目に入るあらゆるものが人間生活の実態であった。

Emily が読み取った現実には正しいかもしれないと Rose は思う。しかし、同時に Rose の心の中には希望もあった。その希望は難しい現実と闘いながらも前へ進んでいこうとする Rose の決意の表明でもある。

I will leap off the ladder even blindfold into eternity, sink or swam, come heaven come hell. Like a rat, swimming through the dirty lake to a distant unknown shore. (p. 368)

上記引用文では、「永遠」「はしご」「浮く」「沈む」「天国」「地獄」「汚濁の湖」「遠い未知の岸辺」「ネズミ」など、希望を表現しようとしながら相矛盾した用語を並列させることで、Rose が抱く希望の複雑な性格を微妙かつ逆説的に描写している。先にもふれた、この小説の巻頭に付された Yeats の詩の一節、「困難なことに魅せられて私の血潮

は乾き、私の心は張り裂ける」の中に見られる矛盾語法は、上記の引用を言い換えた表現だとわかる。そしてもう一つ、Simon がコンウォールの村の教会で見た碑文、「彼らは希望を知らない人のようには悲しまなかった」(p. 188) というまわりくどい言い回しも、上記の Rose の考え方を言い換えた言葉である。

Rose が信じる希望は楽観、前進、展望などの連想でくられる明快なものではない。ドラブルの後の作品 *The Radiant Way* (1987) の中の言葉、「私は善も悪も信じない。苦しみを信じる。苦しみの軽減を信じる。喜びを信じる。死を信じる」<sup>62)</sup> は、*The Needle's Eye* の Rose から15年後の女性人物 Liz がたどり着いた一つの思念であるが、ここには複雑な現実とわずかな希望との相克を生きる Rose の姿の投影が見られる。実際に、Rose は新しく得た仕事、British Council から委託された、アフリカの人々を世話する仕事に期待を寄せている。

最後に小説の最終結末部の「張り子のライオン」を取り上げて、この第6章のキーワードである「逆説性」を再度、確認してみたい。結末部では、Rose の思想を具体的なイメージに置き換えるために、アレキサンドラ・パレスの張り子のライオンを Rose に重ね合わせている。そのライオンは型枠で大量生産された張り子で、しかも放置されていたので、みすぼらしく破損していた。

It was hollow, the lion: shabby, weathered, crudely cast in a cheap mould. Half of its head was missing. It was hollow inside. She peered inside the hole: there were two concrete struts instead of intestines, and somebody had placed carefully inside it a Coca Cola bottle, a beer can, and a few old straws. (p. 368)

この張り子のライオンは、Branston 邸 (Rose の実家) の門柱のライオンと比べると極めて対照的である。手彫りで独自性がある貴族的で牙をむきだしているライオン像とは違って、アレキサンドラ・パレスのライオンは、大量生産された “one of many” (p. 369) である。それは、パレスのテラスから眺めた家屋や街路やドッグ・ショウや大衆と同類である。しかも半分欠けた頭は赤いペンキで落書きされ、垂れた赤いペンキはライオンの下あごに “old blood” (p. 369) のように飛び散っている。このライオンには牙さえない。

ライオンの姿には、血を流す Rose の姿と受難するキリ

ストの姿が重ねられている。<sup>63)</sup> 一人の人間は大衆の中の一人にすぎないが、それでも苦難を通して個性的な存在になり得る。それが、陳腐なライオンの中に見出した Rose の逆説的な希望であった。

She liked the lion. She lay her hand on it. It was gritty and cold, a beast of the people. Mass-produced it had been, but it had weathered into identity. And this, she hoped, for every human soul. (p. 369)

「風雨にさらされ独自のものとなった」張り子のライオンは、Simon が観察した Emily の容貌、つまり歳月の風雨に「美しく枯れた」彼女の容貌とも一致している。Emily の容姿には、長い歳月の中で、「征服もしたが征服もされてきた」人間の極めて矛盾した美しさの質が巧みに描かれている。

Emily had grown so beautiful with the years that it was now almost unbearable, one could hardly bear to gaze at her, so moving were the marks of time and beauty ... her whole face was lined and carved and withered into beauty, ... She seemed the image of time, triumphant, vindicated, conquering but conquered. (p. 360)

このように、粗雑さとグロテスクへの悲観と肯定、前進と後退の並列など、逆説的で矛盾に満ちた表現による人生の把握、これによって、Rose は「信仰なしに今日、宗教的な生活を送る可能性」を探ってきたと言える。Rose と Emily の人生は、「期待していたよりもずっと良いものであったし、ずっとひどいものでもあった」(p. 223) が、二人は、自分たちが幸せな人間だと思っていたし、喜びを見つけ損なわない人間だとわかっていた。これが Rose の把握した人生である。

Davidson は、*The Needle's Eye* を評して、この作品には政治的、経済的、倫理的に解決が難しい問題が盛り込まれ、その答えは容易に提示できないが、それでも“graceless world”だと一見して見える人間社会に存在するかもしれない恵みと希望への肯定で小説は終わっている、と述べている。その意味で、彼は、この作品が20世紀のイギリスの伝統的な宗教小説と比べると暗いし明るい、要するに、はるかに逆説的だと結論づけている。<sup>64)</sup>

(本稿は本学の2009年度研究助成金による研究成果の一部である。)

## 注

35. 本稿は、「現代の「傷ついた癒し手」(1) — ドラブルの *The Needle's Eye* (1972) 考」(同志社女子大学学術研究年報 第59巻、2008年)の後編である。
36. Margaret Drabble, *The Needle's Eye* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1972), p. 100. 以降、この作品からの引用および関連箇所は本文中に頁数を記す。
37. 本稿は、注35にも記したように、2008年に本学の「学術研究年報第59巻」に投稿した論文の後編であるが、この小説のあらましを簡単に記しておく。法廷弁護士の Simon Camish は友人宅の夕食会で偶然、Rose Vassiliou と出会う。彼女は有名な資産家の一人娘だったが、十数年前の21歳の時にギリシャ移民の息子 Christopher Vassiliou と駆け落ち結婚をし、新聞報道を騒がせた女性であった。現在は Christopher と離婚し、莫大な資産の相続人であったにもかかわらず、友人や前夫の非難や反対に抗して、ロンドンの北部アレキサンドラ・パレスの近くのスラム街の家に3人の子どもたちと暮らしていた。Simon は、彼女の確信に満ちた人生観や生きた方に興味を覚え、同時に前夫から要求されている子供の養育権の問題で悩んでいる Rose を助けようとする。もともと労働者階級出身の Simon は中産階級に這い上がった自身のこれまでの生き方を、Rose を介して直視し、自身の干上がった人間性に水が注がれる思いを体験する。法律的な問題に助言を与えるという役割を越えて、彼は Rose 自身の生き方にますます影響され、彼女の中に現代の「癒し手」的な存在を求めていくようになる。
38. マタイ23:2-4「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らの言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見做ってはならない。言うだけで、実行しないからである。彼らは背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれをうごかすために、指一本貸そうともしない。」  
聖書からの引用はすべて『聖書 — 新共同訳』(東京、日本聖書協会、2004)からの借用である。  
*The Bible Authorized King James Version* (1611) (Oxford: Oxford University Press)からの引用も添



えておく。以下、同じ。

St. Matthew 23: 2-4 'Saying, The scribes and the Pharisees sit in Moses' seat: All therefore whatsoever they bid you observe, that observe and do; but do not ye after their works: for they say, and do not. For they bind heavy burdens and grievous to be borne, and lay them on men's shoulders; but they themselves will not move them with one of their fingers.' p. 818.

39. "The Author Comments," in *Dutch Quarterly Review of Anglo-American Letters*, 5 (1975), p. 36.

40. Susanna Roxman, *Guilt and Glory. Studies in Margaret Drabble's Novels 1963-80* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1984), pp. 127-143.

41. *Ibid.*, p. 137.

42. *The Middle Ground* (1980) の Evelyn (ソーシャル・ワーカー) の人間に対する信頼感の基礎にも "care" という概念があったが、これは、Gilligan が言う「思いやりの倫理観」である。

Margaret Drabble, *The Middle Ground* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1980), p. 216.

Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development* (Cambridge: Harvard University Press, 1982), p. 149.

キャロル・ギリガン著 岩男寿美子監訳『もうひとつの声 — 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(東京、川島書店、1986)、p. 264。

43. マタイ 4 : 20 「二人はすぐに網を捨てて従った。」

St. Matthew 4: 20 'And they straightway left their nets, and followed him.' p. 797.

ルカ 5 : 11 「そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」

St. Luke 5: 11 'And when they had brought their ships to land, they forsook all, and followed him.' p. 853.

他はマルコ 1 : 18を参照。

44. 次を参照。拙論「現代の「傷ついた癒し手」(1) — ドラブルの *The Needle's Eye* (1972) 考」(同志社女子大学 学術研究年報 第59巻、2008年) の第3章で詳述した。

45. ヨハネ 20 : 25 「そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、

また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

St. John 20: 25 'The other disciples therefore said unto him, We have seen the Lord. But he said unto them, Except I shall see in his hands the print of the nails, and put my finger into the print of the nails, and thrust my hand into his side, I will not believe.' p. 903.

46. マタイ 7 : 24-27 「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行く者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」を参照。

St. Matthew 7: 24-27 'Therefore whosoever heareth these sayings of mine, and does them, I will liken him unto a wise man, which built his house upon a rock: And the rain descended, and the floods came, and the winds blew, and beat upon that house; and it fell not: for it was founded upon a rock. And every one that heareth these sayings of mine, and does them not, shall be likened unto a foolish man, which built his house upon the sand: And the rain descended, and the floods came, and the winds blew, and beat upon that house; and it fell: and great was the fall of it.' p. 801.

47. ルカ 18 : 29-30 「イエスは言われた。「はっきり言っておく。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子供を捨てた者はだれでも、この世ではその何倍もの報いを受け、後の世では永遠の命を受ける。」

St. Luke 18: 29-30 'And he said unto them, Verily I say unto you, There is no man that hath left house, or parents, or brethren, or wife, or children, for the kingdom of God's sake, Who shall not receive manifold more in this present time, and in the world to come life everlasting.' p. 871.

48. 例えば、自我の分裂と統合は、*The Millstone* (1965) の Rosamund も体験している。

拙著『フェミニズムとヒロインの変遷 — ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』(京都、世界思想社、2011) の第2章の3項『『ひきうす』(1965) における

- 個の再構築 — ポストモダン・フェミニズムという代案」, pp. 49-65を参照。
- Preussner も、Rose が “a whole self” (p. 214) になるために、自己分裂に抵抗する Rose の姿には宗教的な虚構を拒絶するという試みにおいて並々ならぬ闘いが見られると評価している。
- Dee Joh Preussner, *Constructing a Self: Tradition in the Novels of Margaret Drabble* (Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1984), p. 153 & pp. 160-161.
49. Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures* (London: Macmillan, 1980), p. 85.
50. *Ibid.*, pp. 80-86.
51. *Ibid.*, p. 86.
52. Preussner は、Christopher に関して、ドラブルが Simon という男性人物の創造では成功しているが、Christopher は十分に描き切れていないと述べている。Rose は Christopher のことを十分に理解していないし、Simon も読者に Christopher のことを正確に伝える役割をするにはあまりにも彼のことを知らなさすぎる。その意味で、Christopher は *The Millstone* (1965) の George のように影がうすく実体がないと指摘されている。
- Dee Joh Preussner, *Constructing a Self: Tradition in the Novels of Margaret Drabble*, p. 162.
53. Mary M. Lay, “Margaret Drabble’s *The Needle’s Eye*: Jamesian Perception of Self,” in *College Language Association Journal*, 28: 1 (Sept. 1984), pp. 43-45.
54. Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: A Reader’s Guide* (New York: St. Martin’s Press, 1991), p. 84.
55. “The Author Comments,” p. 38 & p. 36.
56. Susanna Roxman, *Guilt and Glory. Studies in Margaret Drabble’s Novels 1963-80*, p. 89.
- 不平等、不正、富の分配などに対するドラブルの関心はインタビューを始めとして、他の小説の中でも枚挙にいとまがないが、近年の作品では *The Radiant Way* (1987) の Brian と Alix, *The Witch of Exmoor* (1996) の David D’Anger の考え方の中に色濃く投影されている。
57. Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures*, pp. 71-93.
58. Dee Preussner, “Talking with Margaret Drabble” in *Modern Fiction Studies*, Vol 25, 1979, p. 575.
59. 例えば、*The Waterfall* の Jane Gray, *The Millstone* の Rosamund Stacey は “free will” と “fate” の問題を取り上げ、両者の共存と統合を図っている。
- 拙著『フェミニズムとヒロインの変遷 — ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』の第4章の2項「19世紀小説の「読み直し」としての『滝』(1969)」, pp. 127-146、および第2章の3項「『ひきうす』(1965)における個の再構築 — ポストモダン・フェミニズムという代案」, pp. 49-65を参照。
60. この場面は「気をつけて目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。」(マルコ13:33)の ‘allusion’ である。
- St. Mark 13: 33 ‘Take ye heed, watch and pray: for ye know not when the time is.’ p. 842.
61. 創世記3:19「お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。」を参照。
- Genesis 3: 19 ‘In the sweat of thy face shalt thou eat bread, till thou return unto the ground; for out of it wast thou taken: for dust thou art, and unto dust shalt thou return.’ p. 3.
62. Margaret Drabble, *The Radiant Way* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1987), pp. 390-391.
63. 注の12番(前編)でも触れたように、「血」のイメージはキリストと直結する。
- ルカ22:44「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」
- St. Luke 22: 44 ‘And being in an agony he prayed more earnestly: and his sweat was as it were great drops of blood falling down to the ground.’ p. 876.
- ヨハネ6:54「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」
- St. John 6: 54 ‘Whoso eateth my flesh, and drinketh my blood, hath eternal life; and I will raise him up at the last day.’ p. 887.
- ヨハネ19:34「しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。」
- St. John 19: 34 ‘But one of the soldiers with a spear pierced his side, and forthwith came there out blood and water.’ p. 902.
64. Arnold E. Davidson, “Parables of Grace in Drabble’s *The Needle’s Eye*” (pp. 66-74) in Dorey Schmidt

---

(ed.&pref.) and Jan Seale(ed.), *Margaret Drabble: Golden Realms* (Edinburgh; TX: School of Humanities, Pan American University, 1982), p. 74.

